アイザィア・バーリン

父と子

トゥルゲーネフと自由主義者（リベラル）の苦境

小池　銈訳

みすず書房

父と子

トゥルゲーネフと自由主義者の苦境

アイザィア・バーリン
小池 銈 訳

みすず書房

I. バーリン
父と子
トゥルゲーネフと自由主義者の苦境
小池　銓訳

1976年12月20日　印刷
1977年 1 月14日　発行

発行者 北野民夫
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京 0-195132
本文印刷所 精興社
扉・カバー印刷所 栗田印刷
製本所 鈴木製本所

© 1977 in Japan by Misuzu Shobo
Printed in Japan
書籍コード 0098-11651-8005
落丁・乱丁本はお取替えいたします

父と子

トゥルゲーネフと自由主義(リベラル)者の苦境

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

序章
I ……12
II ……41
III ……86
付録

思うに、貴兄はロシアの大衆を十分には理解しておられない。大衆の性格はロシア社会の現状によって規定されている。それは沸き立ち噴出せんとする新しい諸々の力を捕え封じこめているのであります。これらの新しい力は重い抑圧に押しつぶされ、はけ口を見出せぬがゆえに、陰欝と苦い失望と無気力とをかもしております。ただ、わずかに文学において、わが国の野蛮な検閲にもかかわらず、なお若干の生気と前進が認められます。このことこそ、作家という職業がわが国でかくも敬意を受ける理由であり、才能は貧困であっても文学的成功のしかく容易な所以であります。また、このゆえに、いわゆる自由主義（ベヲラン）の色合いをもつものならどんな現われであれ、社会全体からこれほどの関心が払われるのであります……たとえ作家の天分がどれほど貧弱であろうとも……。大衆はわが国の作家のうちに、かけがえのない指導者、擁護者を、専制と正教教会と新国民生活様式[1]からの救い手を見出しているのであります。

ヴィッサリオン・ベリンスキー
ゴーゴリへの公開書簡（一八四七年七月十五日）

（1）ベリンスキーの原語は「ロシア的専制・正教・民衆」であり、この三項はニコラス二世の治世初期に、ある教育担当大臣が考え出した公認の愛国スローガンであった。第三の言葉――ナロードノスチ――は、「ポピュリズム」または「民衆」の意味だが、この単語を使ったのは、庶民の「伝統的習俗」に対して、輸入ものの西欧啓蒙思潮にかぶれた「才人ども」の「人工的でっちあげ」をきわ立たせるためであった。

ベリンスキーの書簡は、ゴーゴリがその天才を「本気でだかふざけてだか」蒙昧主義と反動のために奉仕させたことに対する、厳しい告発である。この書簡をある革命グループの秘密会合において朗読したかどにより、ドストエフスキーは逮捕され、死刑を宣告されたのであった。なお本篇のロシア語からの翻訳はすべて著者バーリンの手になるもの。

一八八三年十月九日、イヴァン・トゥルゲーネフは、生前の願いどおり、聖ペテルブルグにおいて、その長友批評家ヴィッサリオン・ベリンスキーの墓の傍らに埋葬された。彼の遺骸は、パリの東駅の近くで簡素な式――そこではエルネスト・ルナンとエドモン・アブーが適切な弔辞を述べた――の後、故国に送られて来たのである。葬儀は、帝国政府代表、インテリゲンツィア、労働者団体の列席の下に行なわれた。おそらく、ロシアにおいてこの三者が平和裡に集

った最初にして最後の機会であった。時代は騒然としていた。テロリズム活動の波は、二年前アレクサンドル二世暗殺により絶頂に達しており、陰謀の首謀者たちはあるいは絞首刑にあるいはシベリア流刑に処せられたが、なお動揺は、特に学生たちの間で、静まっていなかった。政府は葬儀の行列が一転して政治的デモに変りはしないかと惧れていた。各新聞社は内務省から秘密の指示を受取り、葬儀について公式の報道のみ紙上に印刷することを許されるが、この指示を受けたことは漏らしてはならない、と命ぜられた。聖ペテルブルグの市当局も、労働諸団体も、その花環に名前を表示することは許されない。トルストイが、この旧友かつライバルについて演説する予定になっていた文学集会は、政府の命令によって中止させられた。革命のビラが葬列の間にまかれたが、当局はこれにそ知らぬ顔をし、一件は何のこともなく済んでしまったらしい。だが、これらの予防措置、葬儀執行時の不穏な雰囲気は、ヘンリ・ジェイムズやジョージ・ムアまたモーリス・ベアリングの眼からトゥルゲーネフを見ている人びと、いや大抵の人が今でもトゥルゲーネフを見ている見方、つまり、美しい抒情的散文の筆者、田園生活の回顧的牧歌の歌い手、田舎の廃屋と無気力だがたまらなく魅力的な住人との哀歌をかなで

る詩人、気分や情感のニュアンスを描いては驚嘆すべき才能を備えた比類なき語り手、自然と恋愛との詩情を語らせては当代第一流の名手、このようにトゥルゲーネフを見ている人びとには、驚くべきことと思えよう。当時のフランス文人の回想録には、彼は、友人エドモン・ド・ゴンクールが名づけたように、「優しい巨人（ドゥ・ジェアン）」として登場する。この善良な巨人は、穏かで、魅力的で、限りなく愛想よく、うっとりするような語り手で、同朋ロシア人には「海の精（シレーヌ）」と呼ばれ、フロベール、ドーデ、ジョルジュ・サンド、ゾラ、モーパッサンにとっての畏友であり、終生の親友であった歌手ポーリーヌ・ヴィアルドーのサロンに出入りする人びとのうちでも最も嬉しく歓迎される人物であったのだ。ではあったが、ロシア政府の危惧に理由がなかったわけではない。当局は二年前、トゥルゲーネフのロシア訪問を、特に学生たちとの集会を、歓迎しなかった。そしてその意向を誤解の余地のない言葉で彼に伝える途を見つけた。放胆は彼の特質の一つではなかった。彼は訪問を手短かに切上げ、パリへ戻ったのである。

政府の神経過敏は驚くにあたらない。というのも、彼は心理的観察者、精妙な美文家以上の何者かであったからである。当時のロシアにおけるほとんどすべての一流作家と同じく、彼も

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

また終生祖国の現状と運命とに深く関わり心を痛めていた。彼の小説は、当時の自由主義派及び急進派、この両青年層からなる少数だが影響の大きいエリートが、社会的政治的にどのように発展していったかを語る最上の叙述である。いやエリートたちのみに止まらない、彼らの批判者たちについてもまた語っている。従って彼の著作は、聖ペテルブルグの当局の眼からすれば、断じて無害なものではなかった。だがしかし、偉大な同世代人トルストイやドストエフスキーとは違って、彼は説教者ではなかった、時代に向って雷霆の如き託宣を下す気はなかった。彼の関心事は先ず何よりも、自分の共鳴する見解・理想・気質、自分が当惑し反撥する見解・理想・気質、この両方に入りこみ、理解することであった。トゥルゲーネフは、詩人キーツが「受動的対応能力」(Negative Capability) と名づけたもの、即ち自分のものとは無縁、時には鋭く対立するような信念・感情・態度に入りこんでゆく能力——ルナンがその讃辞で力説した才能だが[1]——を甚だ高度に具えていた。ロシアの青年革命家たちの中にも、彼の描いた革命家像の正確さ正当さを進んで認めた者もいたほどであった。生涯の大半を通して、彼は当時の教育あるロシア人を分裂させた道徳的・政治的・社会的・人格的論争に痛切な関心を抱きつ

づけた。特に、スラヴ・ナショナリストと西欧礼讃者との間の、保守主義者と自由主義者との、自由主義者と急進主義者との、穏健派と狂信派との、現実家と夢想家との、なかんずく、老いたる者と若者との、深刻苛烈な確執に心を奪われていた。渦中を離れて事態を客観視しようとした、だがいつもうまくいったわけではない。ただ、彼が犀利敏感な観察者であり、人間としても作家としても自己を批判し、自己を没却し得たが故に、また何よりもまず彼が読者に自分の未来図を押付けたり、説教したり、改宗させようとしたりするのに汲々としなかったが故に、あのよく比較される二人の自己中心的な怒れる巨匠たちよりも、優れた予言者となり、この頃以後全世界的に拡大したさまざまな社会問題の誕生を識別し得たのである。トゥルゲーネフ没後何年かして、急進派の小説家ウラジミール・コロレンコ、彼は熱狂的な讃美者だと告白しているが、この小説家はこう記している。トゥルゲーネフは「当時の生きた諸問題の一番むき出しの神経に、痛いほど触れたので、人びとをいら立たせた。」また、彼は熱狂的な愛情と敬意を呼び起すと共に激しい批判も招いた、そして「台風の眼であった……だが一方、彼は数々の勝利の喜びも味わった。他人を理解すると共に他人も彼を理解したのである」と。(2) トゥルゲー

ネフの作品のこの比較的知られていない一面、現代に最も直截に語りかけている一面を、わたくしは扱おうと考えるのである。

（1）一八八三年十月一日に行われた弔辞の原文については、トゥルゲーネフ「最終作品集」第二版、一八八五年、パリ刊、二九七―三〇二ページ参照。

（2）V・G・コロレンコ全集（ペトログラード、一九一四年）所収の論文「I・A・ゴンチャロフと若き世代」（第九巻三二四ページ）より引用。「ロシア批評におけるI・S・トゥルゲーネフ」（一九五三年、モスクワ刊、五二七ページ）参照。

一

生れつきの気象からいって、トゥルゲーネフに政治的志向はなかった。自然、人間関係、感情の陰影――これら、及びこれらのものの芸術における表現が彼の最もよく理解したところである。芸術と美との表白ならどんなものでも、何人にも劣らず、深く愛したのである。芸術を意識的に芸術以外の目的に使用すること、イデオロギーのために、教訓として、功利的に、そして特に六十年代の急進派が主張したように、ことさら階級闘争の武器として用いることは、彼にとって唾棄すべきことであった。彼は往々、純粋な唯美主義者、芸術のための芸術の信奉者と見られ、また逃避主義と公民感の欠如とをとがめられていた。この二点は当時も、現在と同じく、ロシア世論の一部では、無責任な自己耽溺の見下げはてた形態と思われていたもので

ある。だが、これらのレッテルは彼にはあてはまらない。なるほど彼の著作は、シベリア流刑後のドストエフスキーや後期のトルストイのそれの如く、深く情熱的に関与(コミット)していなかったとはいえ、その著作は社会分析に十分な関心をよせていたので、革命派もその批判者たちも、特にその中の自由主義派(リベラル)が、彼の小説からたっぷり武器弾薬を調達することができたくらいである。かつてはトゥルゲーネフの初期作品の愛読者であった皇帝アレクサンドル二世も、終には彼をおぞましい輩（bête noire）と見做すようになった。この点でトゥルゲーネフは、彼の属した時代及び階級の典型であった。同時代の苦悶する優れたモラリストたちよりも、より敏感、細心であり、また囚われたり不寛容になることもより少なかったが、ロシア専制に対しては同じようにきびしく反撥したのである。茫漠たる後進国において、そこでは教育を受けた者は、数も極めて少なく、しかも語るに忍びない貧困・抑圧・無知の状態に生息する大多数の同朋――彼らはとても市民とはいえない――から全く隔離された国において、社会的良心の重大危機は、遅かれ早かれ、起らざるを得なかった。その経緯はわれわれもよく知っている。ナポレオン戦争はにわかにロシアをヨーロッパに組入れ、それによって必然的に、今まで許容されてい

たよりもより直接的に西欧啓蒙主義に接触させられる。地主階級であるエリートから選任された陸軍の士官たちは、膨湃たる愛国感情の大波に昂められて、部下の兵卒たちとある種の連帯意識を持つに至った。これが一時的に、ロシア社会の硬い階層の障壁を突きくずした。この社会の目立った特徴としては次のものが挙げられる。国家に支配された無知で大幅に腐敗した教会、少数の半ば西欧化しているが訓練不十分な官僚機構、そして彼らが支配し引止めようとしている厖大で原始的、社会的経済的に未発達で半封建的、だが力に溢れ潜在的に野放図な、桎梏をはねのけようとしている民衆、西欧文明に向って、知的にも社会的にも、広く皆の感じていた劣等感、下に向っては得手勝手な弱い者いじめ、上に対してはむかつくような追従によってゆがんだ社会、そこではいささかなりと独立心、創意・根性のある者は、ほとんど正常な発展を計る突破口さえ見出せなかった。こういう状態であれば、この世紀の前半、のちに「余計もの」として知られるようになった、新しい反抗の文学の主人公が生れたのもおそらく無理からぬ処であろう。彼は一握りの教育あり道徳的に敏感な人びとの一員であるが、祖国にいるべき場所を見つけることが出来ず、自分のうちにとじこもる羽目に陥り、夢・幻に逃げこむかシ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com